エミリー・ディキンソン論

詩と超出現象及び存在と反逆

門脇道雄

いまここにある世界とは何か。

世界は存在する物質・現象の総体であるならば、時間空間知覚現象の源である物質が世界の実体である。物質は物と者とに分けられ、物と者ならば人間では世界は模相を異にする。常に現在にとどまる物の存在は、たえず現在を超え出ようとする人間の存在とは在り方が異なっているからだ。人間は物を利用しようが、物は人間に働きかけようとする意志がない。物は単にあるがままの存在であり、人間はいまここではないのである。一方、人間は次の人間を志向するということによって、時間的存在となろう。物に意志はなく単にいまここにあり、人間には意志がありいまここにあることによって、生きようとする意志が、世界を决定する。それによって、世界は、生きようとする意志を果たす者によって決まることであらゆる存在の性質が導かれるからだ。しかしながら、たえず次のいまここを志向している存在にとって、世界は、いったん生まれた起こり、どこにおいてあるか、なぜ生まれるのか、そして、それら、そもそもどこからあるかに何についているかをさぐる意志に志向することにより、時間的存在性が導かれるからだ。
This World is not Conjunction.

Picks at a time of evidence—
Blushing, if any see—
Faith slips—and Laughs, and Rallies
And Crucifixion, shown—
Concept of Generations
To gain it. Men have borne
To guess it, Puzzles scholars—
Sagacity, must go

And through a Riddle, at the last—
Philosophy—don’t know—
It beckons, and it baffles—
But positive, as Sound—
Invisible, as Music—
A Species stands beyond—

This World is not Conjunction.
That nibbles at the soul—
Narcotics cannot still the tooth—
Stone Hallucinations roll—
Much gesture, from the pupil—
And asks a Vane, the way—

[501:1862]
在理由を持たない。今ある自己は、否定され、次の相へと向かいながら、常に脱目的に存在する。次のいまそこへと現するように促す意志がひとという存在である。宇宙は人間と同じ構造に属している界であり、ひとつの物質界である。宇宙はひとの意識によって照射される界である。ひとつの意識によって照射される界である。人間の意識こそは観である。それは、次の相へと踏み出すそうとするこの宇宙において、意志であり、世界そのものを構築する源であるからだ。したがって、世界は、ひとそれぞれぞれに立ち現れるその都度の為によって創られる存在がひとであるからだ。たとえば、たった今行われる行為—食事とか、思考とか、運動、その他—によって異なる自己が創られるべきであるだろう。時間の経過によってひとは創られ、行った行為によってひととみなされるのかを、自らが知ることはない。

世界は、ひとつの奇跡である。誕生のための意志がそもそもありえないのに、生まれた人間がなしのる行為は意志に満ちている。世界はひとの意志によって推し進められているから、それが知ることはない。言い換えれば、自らでさえ次の相における自己を知るのない界であり、消えることのない界である。したがって、世界は己れの界では完結（完成）しないだけでなく、己れの世界がどのようなものであるかわからない。世界はむしろ、次の種（次元）のひとへとリレーされることによって、立ち続けられる。一方、教会における説教と大合唱は、真理を覆い隠してしまうだろう。それらはアプリオリに提示される固定観念であり、衆議決決によって示されゆく思考であるからだ。世界を謎として継続させ、立ち頑ひが死後に救われるかどうかは、神の一方的な意志によるということ。しかしながら、死後に生きるかを信じている者にとって、そのような信仰は無益である。神を畏怖し神の慈悲を求ることによって救われるというのは考え、死ん
A word is dead,
When it is said,
Some say.
When it is said,
I say it just
Begins to live.
That day.

"Among them"
言葉を用いられたときに生き始める存在とは、永遠を生きる存在であるとしても、紙に記され、残された、その瞬間に、永世は約束されている。見知らぬ他者が書籍を媒介にして、書き手の心に介入する。書き手は読まれることに、読む人が書き手の生を受け継ぐだろう。それは、鹦鹉のように حاجульを引いた機会性 Pivot に隠れていないが、それを読むための手が生を引き裂くことによって、書き手から受け取ることによって、詩人未踏の人生を引き継ぐことが、しながるため、言葉を受け取ることによって、書き手の人生を引き継ぐことができる。こうして、世界は結合、詩人の被写者として存在するものを、そのありようを根源的に規定している。読んだ経験を得ることのできる言葉がふたたび創出されると言ってよい。

エミリー・ディキンソン Emily Dickinson (1830-1886)は、一八三〇年十二月十四日、アメリカのマサチューセッツ州アマースター Amherst (当時の人口は二千数百人という田舎町に生まれた。一八四〇年から四十六年までアマースター・アカデミーで教育を受け、一八四七年に一歳半上の兄と二歳半下の妹がいた。一八四〇年代に、アマースター・アカデミーで教育を受け、一八四七年に一歳半上の兄と二歳半下の妹がいた。
が、一八四八年の夏（十七歳）以後、家事を手伝う生活に入ったという。二十八歳ころから詩を書き始め、外に出る
ことになった。一八六二年四月十五日、批評家のドーマス・ウェントワース・ヒギンソン（Thomas Wentworth
Higginson）に手紙を書き、自作の詩4篇の批評を託した。しかし、六月にヒギンソンから才能は認めるが顕著が正確
でないから出版は遅らせるようにと言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるようにと言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるようにと言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版されることはないかった。

立ち上げるような感性的発露が隠遁生活によって引き起こされたことは、六月月にヒギンソンから才能は認めるが顕著
でないから出版は遅らせるように言われ、生前に詩集が出版すること
Circumference—

Disseminating their

Each age a lens

Inhere as do the suns—

If vernal light

The wicks they simulate—

Themselves—go out—

The poems light but lamps—
Judge tenderly—of me
For love of Her—sweet—consuming
To Hands I cannot see—
Her Message is committed

With tender Majesty
The simple News that Nature told—
That never wrote to Me—
This is my Letter to the World
ディキンソンの死後はじめて出版された『Poems (1880)』の巻頭を飾ったこの詩篇は、恋文のようにこの世にある。そして、恋心だけが熱い。それは叶えられぬことが約束された一方的な思いであるからだ。書き送られる詩篇は1755篇にもなるだろう。一生のように、重ねられた思いの数々。小説ではなく詩を書き留めたことによって、作品は存在そのもののようにある。詩は思いそのもの。吐息の熱さそのものであるからだ。層に潜んでいる。この空間、この時間、この世への創念こそが、生きるための発条となった。己れの世界と閉じこめられる。反抗とはそのことである。現実との関係性を読むことによって、新たな世界が現れる。己れの世界が希求される。ここに己れがあることの逆説とは、そのことである。

今を否定することによって生きる実存の形態は、彼方へとある。しかも己れの生を閉じ込める、 outsiderの今にも救いはない。己れはおそらく死のあとにやってくる。つまり、実存しうる生は、ディキンソンにとって死後の跳躍の過程において垣間見える。現在における断念が、死後に蘇るための発条となる。名声というものが生を想い、生きるということは、いまここにはなくとも行うことだ。それは書くことによって、己れの断念を表現することによって己れが蘇る。メッセージは読み手の数だけ現れるだろう。詩が解釈の多様性を帯びて存在しているからだ。詩の意味は、自らの人生の意
味がそうであるように、書き手から読み手の解釈へと委ねられている。するに、詩が発表されなかった謎が解け
てまる。詩の書かれゆくことが生きることと同義であり、読まれゆく予感によってのみ自己の存在が保証されているか
らだ。死後の有名は現在の無名の反転である。
ディングソンの社会からの隱遁の原因としては、恋愛とその破局が伝えられているところである。なかで
も、一九五五年春のフィラデルフィア滞在中にその説教を聞いて感銘を受けた牧師チャールズ・ワズワース
は妻子のあらすじをきわめて詳しく語っている。文通を通じながら一九六〇年の春にはアマスで会うまでになったという。
ワズワースは妻子のあらすじをきわめて詳しく語っている。文通を通じながら一九六〇年の春にはアマスで会うまでになったという。

とされて、遠く離れた土地へと旅立つ牧師にディングソンは失恋の思いを抱いたのではないかという。
ひそかに部屋に閉じこもることが社会への反逆となり、失恋がこの世への失意のメタファーとなる。詩作は失恋のある
事実を発表することへの画策こそはディングソンが夢見た至上の反逆であっ

たにちがいない。

しかも、一八二六年（三十一歳）以降における極端な社会からの隔絶を考えれば、失恋の痛手は隠遁の最大の
原因であったのかもしれない。そして、批評家ディングソンに批評を願い、出版を断念するのも一八六二年である。恋心
がそうであるように、詩集の出版は現世においては叶わない。恋心の世では生きえない思念を表現する恋愛詩は、自己を他方へと企てようとする超越的な志向の発露である。今そこに
ある悲痛こそは、美を生成するだろう。たとえば、一九六二年に書かれた次の詩は、失恋が報われる希望の明るみを目
指して、燦然と今この今に蘇る。
If you were coming in the Fall,
I'd brush the Summer by
With half a smile, and half a spurn,
As Housewives do, a Fly.

If I could see you in a year,
I'd wind the months in balls—
And put them each in separate Drawers,
For fear the numbers fuse—

If only Centuries, delayed,
I'd count them on my Hand,
Subtracting, till my fingers dropped
Into Van Dieman's Land.

If certain, when this life was out—
That yours and mine, should be
I'd toss it yonder, like a Rind,
And take Eternity—
That will not stale—its shine.
If gods me, like the Goblin Bee—
Of this, that is between,
But, now, uncertain of the length.
成する。

詩が実存し、詩人がすなわち詩である。ディキンソンは小説家になれなかった。小説なら、今ある現実はフィクション化され、物語化された世界において生きていたにちがいない。小説家であるならば、部屋に閉じこもる必要はなかったであろう。死後に発見されるなどのということはないであろう。絵がすなわちディキンソンそれ自身であるような事態は起こらない。しかるに一方、詩は吐息のように、この世にある。小さなものであれればあるほど、息遣いは存在に合致するであろう。詩は、フィクションではありえない存在のものであり、物語と化すことはない霊性そのものであるからだ。会えないことがが保証されている。ディキンソンは狂気のなかで醒めていた。第1連から第4連まで繰り広げられる仮定法過去は、現在の事実に反する語法である。すなわち、会えることの希望は、叶えられない。むしろ、叶えられないからこそ恋桜あり、希望する心がいまこそにある存在にエネルギーを充填する。恋桜は仮定法のようにこの世にあり、痛覚こそは仮想しようとする世界を遠くへと投射する。それは、本来的な時間性を獲得しようとする熱望であり、時間性の彼方へと超出しようとする企図である。

得恋はなく恋桜が恋桜する心こそが恋桜であるように、逆境に落ち苦難を浴びるありようこそが存在である。秋のためには夏を一年のためには月々を、数世紀のための裏返しであり、希望桜がなる心そのものの表出である。
とはその年月を払いたけようと試みる。会えるためなら時間を束ねて放り投げようと努めること、時間性である存在がこうして想定のなかでその煩悶と時間が取り除かれることを、実は世界は知らない。詩がそうであるように、永遠がファーアであるような詩によって、書き手が読む手と共鳴し合う世界が生成される。書き手が失意という感性を共有するfoくという詩において、書き手が蘇る。詩の秘められた謎とは、言葉の伝達性によって蘇る存在である。最終的に直説法が戻ってくる。それは、現在における痛みのもの、時間のトリップする想定の果てになおもやってくる痛み、すなわち、夢想を超えてなお痛みの感覚の発出である。時間は超過されている。この世界であり、存在そのものが超うひとつ世界、別の時間性を帯びた世界である。それは、いつも起こるときにも顕われる。読み手が現れるかぎり存在は蘇るからだ。詩は、現世に反抗する芸術である。それは、いまここにある世界を否定して、新たな世界を構築する意志に満ちており、感性であり、感性こそが生き延びる霊性である。輝くのは、喜びではない。伝えるのは、苦悩であり、せつなさであり、悲しみである。世界は悲しみにまつわらず、生成する。詩によって生成される世界の謎が、ここにある。感性が五感に抱えられており、五感が視・聴・嗅・味・触に揺れている一方、痛覚こそは存在から存在へと共有されている。つまり、五感は現実の感覚である一方、痛覚は時間を超えて伝達される。たとえば、次の一詩は、五感を超えた感性の所在を証している。
As if the Cheeks were given—
Yet certain am I of the spot—
Not visited in Heaven—
I never spoke with God—

And what a Billow be—
Yet know I how the Heathers looks—
I never saw the Sea—
I never saw a Moor—
認識と溶け合うことによって、ある種の真理へと導かれることが可能。見たことはないけれども知っているという
逆説的な主張が光り輝くのは、そのせいで。知らないでも見える、見ずでも知っているという
それは信仰という精神活動へのもうひとつの批判が、陰画のように映し出されている。　
それは一般の社会で生きていくことへの批判が、陰画のように映し出されている。　
ども神話したことがなく、誰も天国を訪れ
たことがないなら、何ゆえに信仰心などといったか。　
しかし、荒野や海を見ずとも知っている者にこそ、形式的な認識を避ける必要がある。　
ありが知覚しようとはありうる。目を見ぬものにこそ、形式的な認識を避けねばならない。　
ディキンソンは、死んだなお意志の存在である人間にによる存在という概念の価値転倒である。　
読み手の一人ひとりが彼女のかつての霊性を生きているか。
永世を生きるものは、詩という霊性である。それらを読み手の心を生き延びるだろう。　
詩が唱えられるたびごとに蘇る生活
が生成され、ディキンソンは今こうして生きている。　
替えれば、いまある感性が報われる世界、いまある世つなが報われる世界、いまあら
に開花する世界こそが、期待される。　
死んでなお生きる存在をこそ生きたひとの心がいまなおこころとして存在してい
る。　
世界はひとつの奇跡である。それら、生きようとする者の未知なる世界が他者へと委ねられ、いまどこにある霊性が
ひたすらに叫び延びる。　
言葉は肉体を離れる。霊性として生き延びる。　
すなわち、意識（自己）は存在（即）を離れ、
霊界を生きる。自己を否定し超出してゆく企てのなかに、意識は自らを投げ入れる。人間存在は、自己自身の無であるべきであるかぎりにおいて、自由である。ディキンソンは、部屋に閉じこもり、自己を時間化することによって、無となりえた。

現実にある自己は、「自分がそれではあらぬ存在」として、超出を目指している。人間存在というものの肉薄は、自己がそこではあらぬ存在として、超出を目指している。

世界がそうであるように、決定されない将来をそれはたやすく志向しているからである。サルトルの次のフレーズはディキンソンのここの世における実存の在り方をほのめかしている——人間が無しに、存在が無しになるわけでもなく、この運動に対する世界の優位があるわけでもない。けれども世界のかなたにおけるこの運動の優位があるわけである。

ディキンソンは部屋に鍵をかけて閉じこもったとき、世界の向こう側すなわち読み手の世界から、自己を内化するような意味で、「自分があらぬ存在」としてあるとき、閉じられた部屋から広がりゆく世界を、自己は夢見ている。恋心がそうであるように、いまそこにある一点から次次の無限へと広がっていくならば、存在は彼方を求める。切望する存在形態こそは、ディキンソンの無としてこの世にあるスタンスであった。

存在を超出させることによってしかこの世にあらぬ存在、言い換えれば、この世における歿殺が将来における名声の裏返しであるような世界を彼女は生きて死んだ。死んでなお生きる実存が仕組まれたのは、無名から有名へと超出することができるような世界を信じて疑わなかったと詩人ディキンソンのこの世における反抗によってである。
肉体は現実しているものの単なる偶発性によって支えられているにすぎない。世界は肉体の前にはない。人間が存在するためには、時間の在であるべきであるかぎりにおいて、未踏の世界が夢見られる。自己自身の無であり現象であるばかりでなく、受け手の数だけ存在する世界である。

エミリーア・ディキンソンの1775篇の詩がここにある。他者によって詩が認識されるというだけにとどまらない。一冊の本を媒体にして、詩人がむしろ他者に出会う世界が生成される状態にある。言い換えれば、対他存在という方のあるべき姿が、詩篇に可能性として示されている。それは、灯せばともる火であり、世界を照らする存在原理で、他者によって実存している世界内存在である。

信仰復興運動が隆盛をきわめゆく時代、家族のなかでエミリーアだけは信仰告白ができる存でも蓋然的にある存在でもなく、直接的な出会いによって把握される存在である。我々が暗いからこそ、自己の精神を切り拓いてゆこうとする意志である。かけがえのない己れといえ、存在を詩に昇華させようと静かにそして激烈にあがった営為が、今なお霊性として宇宙に潜在している。言葉に託した死んでいただきながら、ランプの芯のように輝きうる一個の存在が今もここしてここにある。
中村孝雄訳『エミリー・ディキンソン詩集』松柏社、1998年。
中島完訳『エミリー・ディキンソン詩集―自然と愛と孤独と』国文社、1995年。
中島完訳『エミリー・ディキンソン詩集―絶妙自然と愛と孤独と』国文社、1999年。
中島完訳『エミリー・ディキンソン詩集―自然と愛と孤独と第4集』国文社、1994年。

238